
足音がひとつ

睦月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

足音がひとつ

【Zコード】

Z7572D

【作者名】

睦月

【あらすじ】

中学校一年生の綾瀬未来は、はじまったくばかりの学校生活をenjoy!していた。が、ある日の放課後、突然、昔の友達楓が現れる。過去の善行、過去の罪。そして・・・・楓。過去と現在をつなぐのは、たった一人の、幽霊でした。

1 か・・えで？（前書き）

初めての連載＆ホラー小説なんで、つながりとか分かりにくいかも
ですが・・・すいません。

1 か・・えで？

放課後の、中学校。

もう夕方とはいがたい時刻の、校舎の中で。

薄暗い電灯の、美術室で。

一人絵を描いている少女がいた。

綾瀬未来。 13歳。

ただでさえ氣味悪い夜の校舎なのに、独りぼっちでいるところに心細い。

だが、彼女はこの絵を仕上げなければならない理由がある。
一週間後の美術館に展出する絵の、提出期限がもう迫っている。
真っ白なキャンバスに、せめて下書きだけでも仕上げなければならない。

(・・・それにしても・・・)

絵を描きながら、みくるは思った。

(まじで、外暗すぎでしょ・・・。うち、どーやってかえんの??.)

「・・・ま、帰れない暗さじやないけどね・・・」

ボソッと呟いたつもりの一言だったが、誰もいない校舎に響くには十分だった。

自分の声にびっくりし、その余韻が消える頃。

・・・ひた・・・

「・・・!?

ひた・・・ひた・・・ひた・・・。
(・・・当直の先生かな・・・?)

「・・・せつ・・・先生?」
「ひた・・・ひた・・・ひた・・・。

「もう閉めるんですか?」

足音の持ち主は答えない。

「先生? 先生?」

ひた・・・ひた、ひた、ひた。

足音が教室に入ってきた。

足音だけが。

「え・・・」

思わず声が出た。次の瞬間とき。

「何? 何? な・・・何のいたずらなの?...」

みくるはほとんどパニック状態で叫んでいた。

ひた、ひた、ひた、ひた。

と、足音は依然答えず、みくるに迫ってくるばかりだ。

足がすくみ、腰が抜けて、イスから立ち上がることも出来ずに。

みくるはただ体をこわばらせ、恐怖に満ちた瞳めで何かを見つめていた。

そこに在る、何かを。

ひた・・・・・!

足音は止ましたが、何かの気配もみくるの目の前で止まつた。

「・・・な・・・に・・・?」

口が乾か、のどが引かつ、やつと顔になつたのは、その一言だけだった。

何？ あんたは、誰？

「・・・・み・・・くる、ちや・・・・・」

か細い声とともに、一瞬だけ、蒼白く、おびえた表情の少女が現れた。

透き通つた身体は、それがもう生き物ではない事を証明していた。その手を見ると、蒼白かつたみくるの顔が、一段と蒼くなった。

白い、という表現を使いたくなるような色だった。

みくるは力チンと固まり、身体は石に棒が刺さつてこいるかのじとく強張つっていた。

「・・・・か・・・かえ・・・で・・? ?」

ワケがわからないという顔でそう呟いた、その直後。

(怖い！)

その感情が身体を支配し、一瞬にしてまた動けるよつになつた。

それと共に、何かの気配も消えた。

「帰らなきや・・・・また、楓が来る・・・・」

まだ蒼い顔で、田はどこか遠くを見ながらつぶやいた。

その一分の後には、みくるはもう、荷物を持って生徒玄関で靴を履いていた。

(今のは、忘れない。忘れなくちやならない。)

思いながら、家路についた。

1 か・・えで？（後書き）

どうでしょ？

まあ、こんな感じで進んでいきます。

楓との関係とか、分かりにくくしたつもりが・・・。

あらすじ読んでたらネタばれですよね・・・。

まあ、それはそれとして、見苦しくなかつたですか？

これからも、読んで行ってくれると嬉しいです。

2 流歌

翌日。

キーンゴーンカーンゴーン……。

「きりい～つ、れえ～い！」

田直の氣の抜けた号令がかかつた。

『さようならあ～』

「ふう・・・」

みくるはため息をひとつついた。

（長かつたな、今日一日。）

どんなに振り払おうとしても、絶対に耳にしがみついて放さない、
あの声。

『・・・・み・・・くる、ちや・・・・』

みくるは、ふるふると頭を振つて、忘れようと頑張つた。

と、そこに一人の少女が親しげに近寄つてきた。

「みくう～」

なかなかかわいい少女である。

「いつしょかえろつ？」

歌うように尋ね、みくるの顔を覗き込む。

彼女の名前は、伊十院。
伊十院 流歌。

みくるの親友と呼べる娘の一人だ。

「あ、でもでも・・・」

体を起こしながら、心配そうな顔になる。

「昨日、絵え描けたあ？」

彼女も美術部の部員である。

もつとも、彼女の絵はもつ既に、綺麗に色を塗られて美術室に展示してあるが。

「うう～んと・・・。まだ、描き終わってない・・・」

「じゃあ、今日も残るんだ?」

「ええ・・・つと・・・今日は、帰る・・・かな・・・?」

「え? でもいいの? まだ仕上がりっていないんでしょ?」

「うん、大丈夫。あと、色塗つておしまいだし・・・」

みくるは嘘をついた。

流歌は、何にも出来なさそうな顔をしていて、男子にも人気だが、実は真逆で、何でも出来る、優等生だ。

で、あるからして、提出期限等には、何気に厳しい。

早い話が、しつかりしているのだ。

「でも、早めに仕上げといった方が・・・」

と、心配するのも彼女ならうなずけると言う事だ。

「だ～いじょおぶだつてば! ほら、帰ろ?」

「うん、わかった」

（）

「どう、その時の美奈の顔つたら・・・」

「きやははは! あの冷静沈着な美奈がねえ・・・」

下校中、他愛もない話で盛り上がる。

流歌と話をしている時は、あの事を忘れられる。

（）のままずっと、いつやって話をていらねたらいいのになあ・・・

だが、楽しい時間はあつという間に過ぎていく。

十分程度で、流歌との分かれ道まで来た。

「じゃあ、また明日、学校でねえー

「うん、ばいばい」

別れた後すぐに、思った。

流歌は、いいなあ。

（きっと、一人になつても、楓におびえる事なんかないんだろうな・

•
•
)

(それにしても・・・)

・・・本当に、昨日のは、何た「たんたろう?」
一人になると、孤独な時間が来ると、考へてしまう。

足音。声。姿。楓だ。

小二
小二
一集行

「ひた・・・・・ひた・・・・・と、美術室に近づいてきた。あれは、

はかたな
二十七

(案のねに無いしゃん! 何考えてんだか)

そう、思い込もうとした。

（一人の学校つて、怖かつたから、カーテンかなんかが楓に見えた
ひだり

そう思つと、なんだか足取りも軽くなつた。

た
た
た
・
・
・

ひたつ

「え・・・・・・・・?」

た

ひた

卷之三

みくるの顔はみると恐怖の表情に変わった
今、確かに、聞こえた。

ウチが足を止めた後に。
もうひとつ。

こわい・・・こわいこわい・・・。

振り向いたやしになし

けど

振りに向かなき、いはひけ

事実を知らなくてはいけない。

一瞬の間をとつて、みくるはゆっくりと振り向いた。

「・・・・・誰も・・・いない・・・?」

だだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだ

みくるは、走つた。

後ろに、何かいるから。

ひた・・・

ひたひたひたひたひたひたひたひた・・・

そして、それはついてきているから。

「あ・・・足音なんか、聞こえない！… 聞こえない、聞こえない
！…」

「聞こえない聞こえない聞こえない！… 聞こえてない！…」

全速力で家まで帰ると、ドアをバッと乱暴にあけ、
バタン！ ガチャ、ガチャ！ ガツ！
鍵を二つ掛け、チヨーンをした。

さすがに家中までは追つてこない。

「は・・・はあ、はあ、はあ、はあ・・・」

みくるは息をととのえて。

ばくばくと鳴り響く鼓動を抑えて。

何事も無かつたかのよつに、一言。

「ただいま～！」

みぐるは、普通のただいまを語り事で

日常に戾ひつとしたのだろうか？

何事も無い、日常に。

それは、すでに

不可能に違いない。

2
流歌（後書き）

3 恐怖

毎日、だった。

毎日、流歌と帰った。

毎日、他愛ない話をした。

毎日、あつといつ間に時間は過ぎ、
そして、毎日・・・・・。

今日は、雨だった。

「じゃあ、みく、ばいばあい」

「う・・・ん、ばいば・・・い」

流歌と別れたら、気を引き締めなこといけない。
楓が、この頃毎日やつてくる。

ひたひたひたひたと、ついてくる。

振り向いてはいけない。

何事もないように、ふるまわなければならないのだ。

ぱいぱいぱいぱい・・・・・

傘に雨が当たる。その音が、心地いい。

楓の足音を、消してくれる。

そんない

ぴちゅぴちゅぴちゅぴちゅ・・・

わざと、水を跳ね飛ばしながら歩く。

ぴちゅぴちゅぴちゅ・・・

ひたつ、ひたつ、ひたつ・・・

ああ、でもやつぱり聞こえるんだよな、どうしよう。

もう、みくるは慣れてくれた。

自分の後ろに足音がすることを、恐れなくなつた。

自分が、寂しそうな、悲しそうな、青白い表情かおをして。

歩いていると思つて、やはり、足音を恐れずにはいられない。

ガチャツ、

「ただいま〜」

バタンツ

ガチャツ、ガチャツ。

力チャカチャ、力チャンツ。

うん。そうなんだ。

もう、うちには田課になつてるよ。

何事もないようだといまを言つ。

その後、扉を閉め、鍵を一つ掛け、チヨーンまである。

それは、やっぱり楓あいつが怖いからなんだろうね。

今日は、ちょっと違つた。ほんの少し違つた。

扉を閉める時に、隙間から外を見た。

ああ、そっか。

足音が、一人分多いってことは。

足跡も一人分多いってことなんだね？

泥の上にしている、足跡。

足跡が、足音が、ひとつ。

余計に。

楓は、きっと、ずつとついてくるだろう。

楓は、きっと、怒っているんだ。

怒って、そして悲しんでいるんだ。

あの、暗くて悲しい、寂しくて青白い表情かおの中で。

バタンッ。

足跡を視界から消して、鍵を掛けた。

チエーンも掛けた。

そして、

みくるは、きっと、何事もないようにふるまい続ける。

みくるは、でも、鍵も閉めるしチエーンも掛ける。

みくるは、楓を恐れているから。

自分のした事と、過去の思い出と共に。

「みくー！ 今日は残るんじょ？！」

放課後、流歌がみくるの机にやつてきて、追求した。

「え・・・・・？ 今田？ ・・か・えり、たいな・・・？」
みくるの答えを聞いたとたん、流歌の顔が怒りの色に染まった。

(ヤバッ・・イ！)

思つたとたん。

バン！――――

「いい加減にしなよ！―― もつ、絵が出来てないのあんただけだ
よ！」

流歌が切れた。

みくるの顔はサッと蒼くなつた。
流歌が怒るととっても怖い。

規則などが絡むとなお一層怖い。

「・・・・・・・・」

あまりの迫力に何も言えないでいると・・・。

「もう一週間になるよ？！ ズット放課後になると帰っちゃうじや
ん！」

「・・・・・だつて・・・」

「だつて・・・、何？？」

みくるはつまつた。

(だつて、楓が・・・なんて言えるワケないよねえ・・・)
なんとも言えず黙つていると、

「ふう・・・・・。ま、言いたくないならいいけどね？ でも、今

日じとは」

冷静になつた流歌が言い聞かせるよつと言つた。

「絶対に。絵は完成させないと……ね？」

「う…………ん…………」

さすがにそれは、みくるも思っていた事だった。

もう、提出期限は三日後だ。

下書きを仕上げて、色を塗つて……間に合わないかもしれない。

「じゃ、じゃあ、流歌！！」

みくるはいいことを思いついた。

「な……何？」

「流歌も一緒に残つて、アドバイスしてよ……」

「え……？ うん……分かった、いいよ……」

「よかつたあ）。ありがと！」

「ううん。じゃ、そうと決まつたら、ほら、行こ？」

「うん」

流歌は、カバンを持つと、廊下へ歩いていった。

楓はこれまでも、流歌と一緒に時は足音をさせなかつた。だつたら……

(流歌と一緒になら安心だし……。大丈夫、大丈夫)

立ち止まって考えていると、

「どうしたの？ 早く行こ？」

扉から頭だけを出して、流歌が聞いた。

「ううん、なんでもない」

みくるもカバンを持つて、小走りで流歌の方へ行つた。

4 提出期限（後書き）

いよいよ次話から、色々な事が明らかになっていきます！
お楽しみに

5 『朱色』と『赤』（前書き）

更新が遅くなつてすみませんでした！
ごめん、続きを読んください。

5 『朱色』と『赤』

ふたりで美術室にこもつても「う二十分。

今の所、何の変哲もなかつた。

(やつぱり、大丈夫だつたんだ)

みくるは安心しきつていた。

最初の十分で、みくるは絵を書く事に集中し始めた。
(なんてつたつて、後三日だしね・・・急がなきや間に合わないし)

せつきから鼻歌を歌つてゐる流歌を見ると、

なんだか適当にシャーペンで絵を描いてゐるよつだ。

みくるはまた、絵に視線を戻すと、色を塗つていつた。

しばりくすると、

(・・・あ・・・。この色つて・・・この方がいいかな・・・
?)

「・・・ねえ、流歌」

「・・・ん~? ・・・」

なんとも氣のない返事だ。

さつきからずつとこんな様子で、いい加減みくるも飽きてきた。

「ここは・・・じうじょう・・・」

流歌はみくるの絵をチラッと流し見て、

「どお~にでも。お好きなよお~に」

ニヤニヤと笑いながら咳く。

「・・・もお~! そんなんじやアドバイスにならないじゃん!」

不満そうに顔をしかめてみくるが言つと、

「何カン違いしてんの? その絵を描くのはあんたであつて、あた
しではないの」

まるで小さこ子こ言つよつて、意地悪く笑いながら、流歌が言い聞
かせた。

「そおだけどお~・・・」

「はい！ 描く描く！」

「もお・・・・」

みくるは不満そうに筆を取った。
やつぱりこの色でいいや。

ペタ・・・

キャンバスに筆を置いたとたん、

「え・・・？！ その色って変じやない！？」

「うえ・・・？」

「このちの色の方がいいよ。このキレイな朱色・・・」

（なんなの？ まったく・・・。やつぱり自分で描けとか言ってた
くせにい・・・）

少々不満だったが、やつぱり流歌が選んだ色の方が綺麗だと思つた。
(ううん・・・。口出しできない・・・)

「そうだよね、やつぱり流歌のほうがセンスあるじゃん！」

「そんな、まさかあ～！ アタシより上手い人なんていつぱい居る
しい～」

とは言いながらも、流歌も嬉しそうな表情だった。

「あ、あと、この朱色も綺麗だけど・・・。もうちょっと赤を足
した方がいいかも・・・」

と言いつつ、みくるの絵の具入れから赤い絵の具と筆を取り出した。
筆に絵の具を少し出し、それをパレットの上でキレイに広げていく。
「ほら。さっきの朱色と混ぜてみれば～・・・」

と、微妙な色合いで朱色と混ぜていく。

筆を細かく動かし、マーブル模様みたくして・・・。
「はい。このまま塗つてみて？」

「・・・ううん・・・」

流歌の言つ通り、紅葉に朱色と赤のマーブルを塗ると・・・

「・・・うわあ～・・・」

「ね？ こうした方が、葉に動きが出るし、紅葉の微妙な色も表現
できるでしょ？？」

「うん、うん！　流歌すゞおーい！」

「えへへへ・・・・」

と照れくさそうにほっぺをかく姿も、なんだか憧れる。

「じゃ、続きを自分で描いてね？？」

「わかつてゐつて～」

しばらくは黙つて絵を描いていたが、
その沈黙は『音』によつて破られた。

・・・・ひた・・・・

昨日までのみくるなら、分かつただろう。
これが何なのか。
これは誰なのか。
だが、平和な時間を一時間過ぎてしまつたみくるには・・・・
不思議なくらい。
分からなかつたのだ。思い出せなかつた。

「ん・・・・？ 誰か来たのかな・・・・？」
最初に気づいたのは、流歌だつた。
「ん？・・・・流歌、見て来てよ」

「んぐ・・・」

流歌は席を立つて、扉に近づいた。

そして、頭を出して辺りを見わたした。

ひた・・・ひた・・・ひた・・・ひた・・・

サー、と流歌は自分の顔から血の気が引いていくのが分かつた。

「嘘！　誰も居ないよ！？」

「え？　嘘！」

『嘘！』とは言いながらも、みくるは分かつた。

言つた瞬間に思い出した。

そして、大変な恐怖に駆られた。

気が遠くなりそうだった。

「やだ！　気持ち悪い！」

流歌のその声で現実に引き戻されたが、代わりに、とてつもない恐怖が襲つた。

「やだやだやだやだ！！　怖い、怖いよ！？」

「誰？！　誰か居るんでしょ？！」

と、流歌も半ばパニック状態で、必死に見えない人を探す。

「居るわけないじゃん！　その足音は！！　その足音は！」

「やだ！　やだよ！　怖いよ！　誰？！　どこに居るの！？」

「その足音は！　それはあ！！」

「何！？　何なのみくる？！」

「それは！　楓の足音だから！――――――！」

「・・・・・」

一瞬の、沈黙。

依然、足音はひたひたひたと近づいてくる。

「・・・・・え？　・・・・・」

先に口を開いたのは流歌だつた。

「その足音は・・・楓のだつて、言つてんのー」

「楓？！何馬鹿言つてんの？！」

「ずっとー！」の「週間！」
ずっとあの子がついてきたのーー！」

「そんなのつて！　ないよ！」

「あの子の腰痛!! あの子の姿!! すこしずつ、せりて来たの!!」

「あの子は！　もう死んでるの！？」

今度は、流歌が大声を出す番だつた。

ひた
・
・
・
・
・
つ
！
！

足音は、止まつた。
確かにとまつた。

流歌の目の前で。

「逃げて！ 田の前に置け！」

流歌は後ろを向いて走り出した。

ガクンッ！！

3歩も走らないうちに、流歌の体に衝撃が走った。

ドサツ！

と音がして、流歌の体は床に沈んだ。

6 流歌＝楓・・・？（前書き）

いよいよ、物語が大きく展開していきます！
どうぞ、続きを読むください！

6
流歌 II 楓 · · · ?

「流歌つ！！」

かくう夢口

卷之三

法語文庫

何が起つた？？

自分の親友に、何が？

必死で、名を呼んだ。

無我夢中で
彼女を揺すぶた

JAPANESE

卷之二

微かに反応があつた。

汾哥

卷之三

卷之三

「どこか痛いの？
大丈夫？！」

「……………<|||…あ…」

洪武

卷之三

「…・・・流・・・・・歌・・・・・？」

「 もちろん、おまえのやうなことは……」

笑いと同時に、その場の空気が凍つた。

「・・・・・流歌・・・じやない・・・・・」

その事実に気づいたみくるは、首を振りながら、彼女から離れた。

「あんた・・・・・楓?！」

「え? 何言つてんのお? あたしだよ? 流歌でしょ?」

と言いながら、かえで流歌は立ち上がった。

「違う・・・違う!! あんたなんか流歌じやない!!」

みくるはあとずさつた。

今まで、ずっと自分を苦しめてきた奴が、そこに居る。

「流歌は?! 流歌を返してよ!!」

「ええ? ?だから、あたしが流歌だつて、言つてるじやん?」

「何でこんな事に・・・なつちやつたの・・・?」

「・・・・・だつて・・・・・・」

かえで流歌は一瞬唇を噛みしめ、うつむくと、

またたく違う表情で、再び顔を上げた。

「・・・あの時の事、あたしは忘れられないんだもん・・・?」

その瞳には、悲しみと、哀れみと、小さい怒りが浮かんでいた。

「・・・みくるちゃんも、忘れてないんでしょ・・・?」

「・・・・・その口調・・・・・。あんたやつぱり楓なんでしょ!?」

6 流歌＝楓・・・？（後書き）

いかがでしたか？

この後は、楓とみぐるの過去が明らかになっていきます！
どうぞお楽しみに

7 過去の善行（前書き）

今回から、一話に分けて過去の話を綴つていいく予定です。
楓との関係も明らかになりますよ

7 過去の善行

「楓！！」

怒りを含んだ叫びが教室に響いた。

「・・・・え・・・・・？」

楓は怯えたように、長い前髪の向こうから、チラリと声の主を見た。
「え？ ジヤねえよ！！ あたしのカバンに触らないでよーーー！」

「・・・え・・・あ、・・・・ゴメン・・・・」

楓は自分の側にあつたカバンから一歩遠のいた。

「ゴメンじゃねえよ！！！」

沙絵はものすごい剣幕で駆け寄ってきて、自分のカバンを掴み、また戻つていった。

「ああーあ、やだやだ！ カバンが穢れる！！」

ため息と共に愚痴を吐き出しながら、沙絵はパンパンとワザとひじくカバンを叩いた。

「きやははは、あんなに言つたらかあいそつじやん！！」

沙絵の友達、魅華はそういう言いながらも、本当にそう思つてゐるわけではなかつた。

「はあ？！ だつてムカつくじやん！！」

「まあ、分かるケド」

「なんかねえ、あいつの態度見てるとイライラしてくるんだよね

え～

「うんうん」

魅華は、同感！ とうなづいた。

「でもね？ あいつにもひとつだけいいトコあるんだよ？」

「うつそだあ！」

「ホントだつてばあ！
「じゃあ、言つてみ？」

楓は遠くで、聞き耳を立てていた。
いつも自分をいじめている沙絵が、今日は自分をほめている?
あたしのいい所つてどこだらう？？
静かに、期待していた。

「うひの、ストレス解消になつてゐつて」とお～！

体が凍つた。あたしが?
あたしが、沙絵ちゃんの、ストレス解消になつている?
たつた一つのいい所が・・・ストレスがなくなる事・・・。

「うつわあ～！ いつじわるう～！」

おおげさな笑い声を立てて、二人は教室から出て行つた。

ポロツ・・・

楓の目から涙がこぼれた。

教室内は、しいんと静まり返つてゐる。

みんな、見てみぬふりだ。自分が次の標的になるのが怖いから。

「グスツ・・・ウ・・・ヒック・・・
ポタポタポタと、涙は頬をつたづ。

「…………だい……じょぶ……？」

一人で楓に声をかけてきた少女がいた。
（…………た…………しか…………みくるちゃん…………だつけ…………）

「グスツ……うん。大丈夫……だよつ……」

無理矢理に涙を止め、笑顔を作った。

「あ……のね……？ うちに出来る事あつたら、何でも言って？」

「え……う……ん。ありがとう……」

今まで誰も自分に声をかけてくれる人はいなかつた。

沙絵の、あの暴言をのぞいては。

それなのに、いきなり声をかけてくれる人がいた。

さらに、協力したいと言い出した。

楓は……幸せだ。

キーンゴーンカーンゴーン……

「あ……じゃあね？」

「うん。ばいばい……ありがとお」

涙は止まっていた。

目ははれぼつたいし、鼻もつまっているけれど。
味方が、出来た。

楓は……幸せなんだ。

- - - - - 翼口 - - - - -

ガララララ・・・

教室のドアを開けて、楓が中に入ると・・・。

「あ、楓え～、おはよお～」

甘ったるい声を出して、わざとらしく沙絵が近寄ってきた。

「え？ お・・・おは・・・よ・・・」

「今日も、学校頑張りうねえ？」

「え・・・？ う・・・ん」

「じゃねつ

「・・・・・ばいばい・・・・? ? ? ?

何がなんだか分からなかつたが、自分の机に近寄つた。

ああ。分かつた。ナルホドね。

落書きだつた。マジックかなあ？

『キモイ』

『ガツコ来んな！』

『クライんだよ！　お前が来ると…』

『穢れる。マジ消えて？』

『クサイ』

『帰れ！』

こう言つた言葉の羅列だった。

筆跡をこまかす為か、ワザと汚く書いてある。
あるいは、書き殴つてあるといったほうが正しい。
どうしようつか……。

涙は、出なかつた。

持ち前のマイペースで考えて、とりあえず、荷物を降りすことにして
た。

カバンの中の教科書類を出して、机の中に入れる。

ガサツ・・・バサツ！

「ん・・・？」

机の中に入つていたのは、大量のこみだつた。
というか、紙くずだつた。

くしゃくしゃにされたそれを開いてみると、学校に置いてあつたノートが、破られたものだつた。

楓の、スケッチノート。

楓が描いた絵の上に、『へたくそなんだよ、このバスー』
書き殴つてあつた。

いくつかを開いていくと、今まで自分が描いてきた絵がくしゃくし
やに丸められていた。

白紙だつたページも破られて、メッセージが書いてあつた。

『バス』

『絵ばつか描いてんじゃねえよ…』

『この下手くそ』

『顔だけじゃなくて絵もキモイ…』

『消えろ！』

『冗談は顔だけにして』

『なにこの絵』

といつよつな、暴言。

すべてを机から出して、ゴミ箱にガサッと捨てた。
開いたスペースに教科書を入れて、戻つてくる。
カバンをロッカーに入れ、さてどうしようか？
マジックを消すのは一苦労だろ？

いつそ、職員室に行って、落書き消しを借りて「よしが・・・？

職員室に行って、薬品を借りて戻つてくると、教室内から怒鳴り声
が聞こえた。

なんだらうと思つて扉を開けた。

ガラツ・・・

「あんた、卑怯なんだよ！…」言いたい事あつたら、はつきり言え
ば？！」

「はあ？！だからひらひらじやないって何度も言えればわかるんだよ、
バカ！！」

「あんたたちしかいないでしょ？！他に誰がいるつて言つの…！」

「つけらばつか、疑うんじやねえよ！…他にも誰かいんだり…！」

開けた瞬間に、耳が痛くなるような、金切り声。

言い争つてゐるのは、みくると沙絵達だつた。

しばらく聞いてみると…

(楓の事かなあ・・・)

みくるが楓をかばつてゐるらしかつた。

「・・・みくるちや・・ん？」

「・・・楓・・・・・」

「もういいよ？ だつて、沙絵ちゃんもやつてないって言つてゐるし・

・・・

「だつて！ デウ考えたつておかしいでしょ？…」

「…………もつこいつて…………いってるんだ……よ?？」

「つー?」

今まで、この子と一緒にクラスについて、感じた事のなかった威圧感。あどけない、やせつい口調の下に、ものすごく哀しみを持っている。

「う・・・わかった・・・・」

そう言つしかなかつた。どれだけ、独りで耐えてきたか、今、分かつた気がする。

「うん! ジゃあ、ほら! 先生にコレ借りてきたから、一緒に消すの手伝ってくれないかなあ? ?

「・・・わかつた。・・・いいよ?」

「ありがと!」

「ふう。・・・おわつたあ・・・」

「うん。きれいになつてよかつたあ

「手伝つてくれて、ありがとね?」

「お礼なんていらないつてば! 友達だつたら当然でしょ?」

「楓と・・・・・友達になつてくれるの・・・?」

「え? もう友達だよ? イヤ?」

「え? 全然! ありがとう! あたしだち友達だよね!」

「そう。親友だよ?」

「・・・・・うん。ありがとお

「じゃ、ほひ? もう授業始まるよ?・?・?

「そうだね。ありがと」

その日は、それ以上のいじめはなかった。

・・・・・『楓』に対しても・・・・・

7 過去の善行（後書き）

どうでしょ？

次回は、『8 過去の罪』です。
そろそろ、この物語も真ん中です。
連載としては短めの構成ですが、そこは新人なんで・・・
勘弁してください・・・ m () m
では、次回もお楽しみに！

8 過去の罪（前書き）

更新が遅れて申し訳ありません！
どうぞ、続きを読むお楽しみください。

「で？ 何か用なわけ？？」

誰もいない、教室の片隅で、みくるは面をひそめつゝ言つた。

「用？ 用はね、うちらの邪魔すんの、やめてくんないって話だよ！」

魅華ともう一人の仲間の千鶴と共に立っていた沙絵が言い放つた。

「邪魔・・・か。うちが、いつあんたたちの邪魔したんだよ？」

「はあ？ 分かつてないわけ？ 楓の事だよ！ 味方につかないでくれる？ あいつの」

「何言つてんの？ 分かつてないのはそっちだよ。なんで友達の方しちゃいけないわけ？」

「今までなんも言わなかつたくせに、いきなりいい子ぶつてんじゃねえよ！…」

「今まで自分の間違いに気づかなかつただけだよ」

「間違い！？ 間違つてんのはあいつだろ！！ 楓だよ！！」

「何で楓が間違つてんの？ あんたらが勝手に言つてるだけじゃん」

みくるは比較的冷静であるが、沙絵とその仲間はもう理性が飛んでいる。

喚き散らしつつ、意見を言つてるのでワケが分からなかつたが、要約すると「うつうつ」とらしい。

『楓がいじめられるような性格をしているのが悪い。

うちらは楓にそういう性格直せよと教えてあげているだけ。

』の頃せつかく楓が反省してきたんだから、お前は口を出すな『いいかげんにしてよ！… そんなの、いじめの理由を正当化してるだけじゃん！』

『こじめじやないつつてんだろ！ とにかく、これ以上邪魔した

ら、次はお前だからな！

「やうやう。その腐った性格、叩きなおしてやるよ。」

「・・・腐つてんのはそつちだろ・・・・」

「ああ？！」

「信じらんむ

「信じらんない！ いじめをやめろって言えばいじめじゃない、楓の味方をするって言えば邪魔すんな？！ 全部自分たちの都合のいいように！ 腐った性格？！ よく言つよ！ あんたらなんか腐る通り越して、土に返つてゐじやん！」

「何だよ！ いきなりキレでんしゃねえよ！」

「何だよ！」

それだけ言つと、みくるはサツと魅華の横をすり抜けて、家に帰つていつた。

「つ・・・・！ 何だよあいつー！」

「・・・ビースンの？ 沙絵？」

「・・・まあ、あいつを潰す・・・」

「オッケー！」
クスクスツ・・・」

三人は誰もいない教室の片隅で、妖しく笑つた。

ガララララ・・・

朝、みくるは教室の扉を開けた。
田に憎しみをたたえて。

生徒玄関で下駄箱を開けたみくるは愕然とした。

ガサツ、バサバサツ・・・・!

音を立てて、ゴミ箱の中身をそのまま入れたかのよつな大量のごみ
が落ちてきた。

「つづ・・・・・！ やられた・・・！」

ゴミ箱を足元に持ってきて、下駄箱の中身をそこに移した。

「はあ・・・・。こんなことしかできねえのかよー！」

いつになく荒っぽい口調で、乱暴に靴を下駄箱に入れて、上履きに
足を入れた。

「つ・・痛つ・・・・！」

上履きの中に、画鋲が入っていた。

手が込んだ嫌がらせだった。

上履きの中敷きを取つて、底に画鋲をいれ、上からまた中敷きをか
ぶせる。

見ただけでは、靴底から少し金色のとげのようなものが突き出いで
るだけ。

一目見ただけではわからないうになつていた。

靴から画鋲を取り出して、だまつて教室に向かつた。

何気なく沙絵たち三人に目を向ける。

こちらの反応をうかがっているような目つきだった。

みぐるはあえて何にも言わずに、まっすぐに自分の席に向かった。

机には何の変哲もない。

(・・・楓には気づかれずにうちを遠ざけたいって事か?)

それならそれで都合がいい。

楓に余計な心配をさせずに済むだらう。

一人で戦つてみせる。

うちは独りじゃない。

いざとなつたら、楓もいるし。

それからは、毎日毎日だった。

ゴミ箱の中身を下駄箱に。

下駄箱の中身をゴミ箱に。

ゴミ箱の中身を机に。

机の中身をゴミ箱に。

落書きとかさ、田立つ嫌が^{モソ}らせがないのは、楓に気づかれたくない

為?

『それなら受けて立つてやる!』

強がつてたのは、最初の一週間だけだった。

だって、ウチはもともと、普通の女の子だった。

例え話をしようか。

例えばかり、

提出物があるとあるじゅん？

わざわざるとや、

1、出せない

2、わざわざと出す

3、出す。たゞ、真面目にせよひげなくつて出す

答え、「出すとか？

『2』バンの子のと、プリント。出すとかとある。

うひは、『3』だったわけ。もともとはね？

例えばかり、

イジメがあるとすこじゅん？

そひするとか、

- 1、いじめる
- 2、いじめられる
- 3、黙つてみていろ

うひと。見てもいいなによ。

知つてはいる。だけど、何も、しない。みたいな？

そうだね、俗に『見つづり』とかってやつ？
やつぱあ、うひは、『3』バンだったわけ。

『1』もイヤ。『2』もイヤ。

なら『3』しかねえじゅん？ みたいなわあ・・・。

今はね、『4』だよ。てか、『4』になりたいと思つてる。
実際は『2』に近いけどね？

4、『2』の味方になつてあげる

とかつて、カツコよくない？

でも、そんな甘いもんじやないつて知つた。
格好イイつてだけで、救えるモンじやない。
だつてさ。『1』はまだいいんだ。もうホラ、諦めついてるから。
問題はさ、『3』だよ。

哀れみを込めた眼で、チラッと見てきてさ。
ヒソヒソヒソッ・・・つて？

そんな眼するんだつたら、助けてよ。つて。
ゴメン。うちが悪かつた。

格好だけで行動した、軽はずみなうちが悪かつたから、
未来うひと楓を助けて？

つて言いたくなる。助けを求めてくなるけど・・・。
誰も助けてはくれないんだ。つて、そう思つ。この頃は。

まあ、とにかくさ、そういう『普通』の女の子がさ、
いじめられて、それに耐え切れなくなつて。

守りうとしてた『2』の子は何も知らずに笑つてて。

うちは、身代わりになつてたわけ。

もう精神がボロボロだつた。

でも耐えたよ、耐えた方だと思つ。

一ヶ月ぐらいかな？

「沙絵・・・・。もう、やめて・・・・くれない？」

放課後、三人の前で弱音を吐いた。
みぐるは負けた。

そこからはもうトントンと話が進んだ。

『もう楓には話しかけるな』

『もう楓の味方はするな』

『もう沙絵達の邪魔はするな』

そんな条件。

全部呑んだ。

最低だと思つ。思つた。自分でも。

でも、その時はそんな事考える余裕なくつて。
今考えると、最低。

- 1、いじめる よりも。
- 3、黙つてみている よりも。

5、味方ぶつて、見捨てる

最低

「じゃ、もうあんたへの嫌がらせはやめてあげるから

勝ち誇つた瞳で、甘つたるい声で沙絵は言った。

言うしかなかつた。

「じゃあ、約束どおり、楓こな、もひ干涉しないでねえ～？」同じような勝ち誇った瞳で、魅華も言った。

「あんた・・・クスクスッ・・・最低だねえー? てたつてことでしょー?」
結局偽善者ぶつ

千鶴に言われた時は、『「うするしかないんだもん』と思つた。
でも、やつぱりうちは…………最低だ…………。
。

「は～あ・・・。フフッ。楓がどんな反応するかなあ～？」

「楽しみだねえ～、沙絵？」

「うん！」

「じゃあ、用事は済んだわけでしょ？ わたしと戻つたら、沙絵がうちの頭を軽く小突きながら意地悪く言つた。

「バイバイ。『偽善者』、さん」

「また明日ねえ？」

教室からみくるがいなくなると、三人は不敵に笑った。

「んじやあ～！ 邪魔者も排除した事だしい～！」

「やりますかあ～！」

「ホントにやるのあ～？」

「あつたりまえじやあ～ん！！ せつかく心優しき未来さんみくるが諦めてくれたんだしい～？」

「バレたら怒られちゃうよ？」

「誰も、あたし達がやつたなんて言わないって！」

「だつて分かるじやん！ クラスでこんな事やる人、ウチらしか居ないじやん！」

「だからって、チクるやつなんていないって！」

「でもさあ～？・・・」

「る・・・つさいなあ～！ グジグジ言うんだつたら抜けなよ～！

あたし一人でやるから～！」

「ええ？～ やるよやるよ～～！」

魅華は千鶴の腕を引っ張り、沙絵の後に続いて楓の机に行つた。

「あいつ、全部置き勉してるからなあ～」

ガサガサ、と、楓の机の中をあさつていた沙絵はふと手を止めた。

「お、ホラ。筆箱があつたよ～」

「それでいいじやん。早くしよおよ～」

「あせるなあせるなつ」

その筆箱を手に、黒板の前に集まつた三人は手に手にチョークを持つた。

お決まりの、『落書き』だつた。

『馬鹿』

『死ね』

なじはもむらん、

『お前に味方なんかいねえんだよ』

『もつ学校くん』

などなど。

一通り書き終わると、沙絵は教室の隅に向かって筆箱を投げた。
スト・・・ガサツ・・・・・
ゴミ箱の中へ。

「わあ～ヒト、シカ、つらひがまみるかあ～」

「オッケエ」

「今田はどうか寄つてくの？」

何事もなかつたかのような涼しい顔で、三人は自分の荷物を持つて教室から出て行つた。

卷之三

おかしいなあ
・
・
・
・
。

いつものみくるぢやんだつたら、楓が来たらすぐにおはヨウつて言つて近づいてきてくれるのに・・・・・・・・・・・・・・・・・。

楓は自分からみくるの席に近づくと

「...」：「...」：「...」

と元気に挨拶をした。

・・・・が、肝心のみくるからは返事が返つてこない。

おははめにいづばつ二頃のアラバハ、アラバハ

無愛想に、それだけが返ってきた。

(おかしいなあ・・・・・。お腹でも痛いのかなあ)

考えながら自分の席につき、バックをロッカーに入ってきた。先生が来るまでの間、絵でも描こうかと机の中に手を入れた。

(來た。)

いつもいつかだったら、真っ先にオハヨウーって言つんだけど・・・

『話しかけんじゃねえぞ！』
　　と、こう雰囲気が伝わってくる。

（・・・・・もうあんな日にあうのはイヤだ・・・・・）
だから、声をかけない。

すると、楓の方から机に寄ってきて、

「…あらわん!」

۷۱

といつ条件が頭をよぎる。

なんとも言えず黙つていると、楓はもう一度挨拶をしてきた。

出来るのは、ただ無愛想になるより、手だけを動かして、声を低くして

すると、楓はそれで満足したのだろうが、自分の席に戻つていた。

無い・・・。

昨日まではあった、楓の机の中に確かにあった。
筆箱が・・・・・・無い。

沙絵ちゃん達がやつたのかなあ？

この頃は嫌がらせが無くって、安心してたのに・・・・。
ああ、でもそうだ、楓はもう独りじゃない。
みくるちゃんが居るから大丈夫だ。

(何? 楓、何でこっち来るの?)

カタンと席を立つて、楓はまっすぐみくるの机に向かってきた。

みくるは慌ててうつむいた。

机の上の、彫刻刀で彫られた落書きを見る事に熱中した。

「あの……みくるちゃん……（…………何？ 楓としゃべったら、またうちが標的にされちゃうんだよ？）

ウチは何にも言えなかつた。

「…………筆箱が……なくなつちやつて……」

「…………」

「一緒に探してくれないかなあ？」 よかつたら・・・・・

答えてあげたい。でも、斜め後ろから沙絵達三人の視線を感じる。『しゃべるな。味方するな。独りにしろ、そいつを』

という、痛い、悲しい、怖い視線を。

楓、ゴメンネ。

でもさ、楓、そんなにまでだつたの？

そんなにまでうちを頼つっていたの？

楓。あんた馬鹿じゃないの？

人間なんて、いくらでも裏切るんだよ？

人間なんて、いくらでも裏切られるんだよ？

そう思つと、逆にこの、愚直なまでに人を信頼する女の子が憎たらしくなつてきた。

「…………みくる……ちゃん？」

「もう一ついふさになあ！！」

「え・・・・・？」

「もづ、うちに話しかけないでくれるかなあ？」

「ええ？ 楓、なにか気になる事しちゃつたのかな？！」

「・・・・・・・・・・」

「お願い、直すから、悪い所あつたら、直すから・・・・・

自分が悪いと思つてゐるの?

悪いのは100%ひゃくぱーうつ。

そんなに必死になられると、今度はそこそこが憎たらしくなつてくれる。やつぱりあんたは、バカだね。

「・・・・自分で考えてみればっ・・・・・!」

楓に悪い所なんて無いけど、口が勝手にそいつ言つてしまつた。

後ろで沙絵達が笑つてゐるのが分かる。

もうこの教室から出て行きたくて、楓を押しのけて、扉に向かつた。

「そんな事言われたつて・・・・・」

楓は小声でつぶやいた。

つぶやきながら、視界がどんどんぼやけていくのを感じた。

「わかんないよ・・・・・」

ポロポロと涙がこぼれ落ちた。

どんないじめを受けるよりつらい。

友達だと思ってたのに、裏切られた・・・のかな・・・・・・??

とうとう床に座り込んでしまつた。

「わかんないよ、みくるちゃん――!――!

鳴笛と共に、悲鳴に近い声が自分ののせいかり田舎のを聞いた。

あたしは、やつぱり最低だ。

罵つてもいい。

口汚く、罵られても、いい。

「最低だよ！ あんた」と、軽蔑されても、いい。

あたしは、それだけの事をしたんだ。

「メンネ、楓・・・・・。

9 流歌＝楓

美術室。

楓は、床にぺたんと座っているみくるの前に立っていた。

「結局最後までみくるは助けなかつたし……」

いきなり楓が口を開いた。失望したような口調だった。

「楓は・・・・・・」スカレートしたイジメに耐え切れなくつて……

「みくるは怯えきつた表情で楓を見ていた。

「その命を絶つた・・・・・・・・。知つてる？ 首をつるつて……

・苦しいんだよ」

楓の顔が本当に苦しそうにゆがんだ時、みくるは田に浮かべた涙を一粒落とした。

「でも・・・・」

ふつ、とふいに楓の表情がやわらいだ。

「イジメの苦しさよりはましだつたって事だよ・・・・？」

「今さらこんな事言つても手遅れだけど・・・あの時味方が一人でもいれば・・・・・・・」

また楓の顔が一瞬ゆがんだ。

と、思うと眼から一筋の涙が流れ落ちた。

「楓は今、みくると一緒に美術部に居たかもしれないのに・・・・・

「グスツ、と一瞬泣いた後、楓は服の袖で涙を拭いた。

「今度はあたしが、みくるに仕返し・・・」

一度手を後ろに隠すと、また出した。

そしてその手には、柄はこげ茶、刃は銀色。
そして・・・先の方は鮮やかで、艶やかな

刀は銀色
艶やかな・・・・・赤。

血のついたナイフを握っていた。

「風……………」
「……………」
「……………」

みくるは泣きながら、後ずさりながら、必死で謝った。

金匱要略

「ねえ・・・許してよ・・・・・。お願い楓、ごめんねえ・・・・・

ナイフを手に持つて近づいてくる楓に対して、みくるは恐怖も抱いていた。

だが、それよりも、楓に対してのすまなさでいっぱいだった。
恐怖と、すまなさで、みくるは謝った。

卷之三

楓は微笑を浮かべながら、みくるに向かつてすゞい速さで近づいてきた。

「お願いお願い……！」ごめんねえ………！」

とうとう田の前に来た楓は、ナイフを振りかざした。

世界が真っ暗になる直前、
ナイフが自分に向かって来るのを、みくるは見た。

9 流歌＝楓（後書き）

と、いう事です・・・。

まあ、ありきたりな終わり方ですよね～（笑）
流歌はどこになつてしまつのか？！
みくるの運命は？！

と言つわけで、次回、『10 うちが・・・?』
の答えが分かります。

そろそろ終わりに近づいてきました。
引き続きお楽しみくださいw

10 つが・・・?

「つぐ・・・」

左腕にチクチクと痛みを感じ、
みくるは目をゆっくりと開けた。
心は落ち着いていた。

何が・・・・・あつたつけ・・・?

視線を腕に向け、深い切り傷を見た時、

「楓・・・!」

みくるは思い出した。

そう。流歌が楓にのつとられて・・・
えつと・・・楓が襲ってきて・・・
どうしたつけ?

ふと顔を上げた。

目の前は、血で溢れていた。

血だまりの真ん中には、うつぶせに倒れた、流歌。

「流・・・歌・・・? ! 何 ? 何 !」

慌てて立ち上がろうとしたその時、腕に抵抗を感じた。右腕を見ると・・・

1脚の、イス。

血だらけの・・・イス。

血だらけ?
どうして?
何で、血だらけ?

ああ。え?

「うちが・・・・・・流歌をつ・・・? ?

顔が、さつ、と蒼くなつた。

みくるが? 流歌を?

え? なんで?
何のために?
誰のために・・・?

楓、だ。

楓にのつとられた、流、歌を・・・。
自分が、

殺した。

考えがそこにたどり着くまで、しばらくかかった。

「い・・やあああああ！－！」

まるで、汚いもののようにイスを突き放し、
みぐるは美術室を飛び出し、学校を飛び出し、
校庭を突っ切つて、どこまでも、走っていった。

逃げなきや。

どこへ？　どこへでもいい。

逃げなきや。

なんで？　来るから。

来るから。

誰が？　誰つて・・・

あれ？　誰が？

楓は、いない。

もういない。

てこうことませ

「これで……よかつたのかも……」

ふと足を止め、息を整えた。

「うひが流歌を殺した？」でも、流歌の中の楓も一緒に逝つたはず・

「・

「めんね、流歌・・・」

自首、しよう。

流歌を殺した、殺したんだから。

警察署に向かつてゆくへつと歩いた。

が。

・・・ひたつ・・・

「・・・え・・・？」

ぴた、と足を止めると、

・
・
・
・
ひたつ
・
・
・

ずれる。足音が、うちのじやない物あしおとが。ひとつずれて、聞こえる・・・。

「足音が・・・ひとつ・・・余計に・・・?」

走りながら、考えた。

じゃあ、何のために？

何のために、
流歌を殺したっていうの？

ずっと走った。

息が切れても走った

رائحة

止まつたらダメ。

楓は、ずっとついてくる。

「「」せひ、「」せひー・

もつ向キロ走つ ただるうつか?
ヒュー・・・ ヒュー・・・

喉がなつてい。

「がつ・・・・」じまつ！ げほげほつ・・・・・

むつ・・・・。苦し・・・・い・・・

「げほひー・

せきをした瞬間に、血が喉から飛び出た。

え・・・・つ？

反射的に口に手をやると、赤い液体がべつとつとつこた。

でも、

止まれない。止まつたら、今度こそ殺される。

「げほつ・・・・がつ・・・・げほげほつ・・・・

血の感覚が喉を伝づ。

体が・・・限界だつ・・・・！

「あつ・・・・！」

足がもつれた。そして、転んだ。

「ぐあつ・・・・・！」

殺される・・・・。

けど・・・・・・

もう、いいか・・・・。

頑張った。十分頑張ったから・・・・。

もう、大丈夫。後悔はない。
このまま、眠るつ。

ぱたぱたぱた、と足音がした。

だが、かまうものか。

いいよ？ もう、十分だよ。

好きにしてください。

うち・・・はつ・・・もう・・・眠る・・・からつ・・・
ゆつくりと、眼を閉じた。

ヒュー・・・ヒュー・・・

ところ、苦しそうな音を聞きながら、眠りに落ちた。

10 いひが・・・? (後書き)

といひつい逃げるのをあきらめてしまったみくる。

楓はみくるをじうするのか?

次回は『11 北条楓 死亡推定時刻 深夜12時頃』。

過去の話をもう一度詳しくかくつもりです!

引き続き、お楽しみください

「… みなさんに… 悲しいお知らせを、しなくてはなりません」

朝一番に教室に入ってきて、先生が言ったこの言葉。

ざわ・・・・・

半分的好奇心と、半分の不安で、クラスは一瞬ざわついた。だが、また元に戻った。

しんとした教室で、先生は口を開いた。
が、すぐに閉じ、同時に眼も閉じた。
何をしているんだろう?

泣いていた。すりなきが聞こえた。

「ぐすっ・・・・・」

「くす・・・・・」

五分ほどそうしていただろうか?

始めのうちは、みんな何が起きたか分からず、啞然としていた。しかし、その空気に耐え切れなくなつた人間が、委員長に催促し始

めた。

「え・・・と・・・。先生? 何があつたのか、みんなに話してくれません?」

まごついていた女委員長だつたが、立ち上がつて、先生の話を促した。

「あ・・・ごめんなさい・・・ね。説明・・・しなく・・・いや、ダメよね・・・」

途切れ途切れに、すすり泣きながら、先生は言つて、それから涙を袖で拭いて、顔を上げた。

「実は・・・楓ちゃん・・・。北条楓さんが、今朝、亡くなられました」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

沈黙。誰も何もいえなかつた。

みくるだつて例外じゃない。

何? 何? 楓・・・が。死んだ・・・?

先生の言葉の意味を飲み込むのに、時間がかかつた。

口火を切つたのは委員長。

「先生?! それってどういう事!?!?」

普段は教師に対して常に敬語の彼女も、この時はそんなものは忘れていた気がする。

委員長に続いて、

『死んだ?・・・つて何?』『いつ?』『何で?』

そんな会話が、誰に言つともなく、生徒達の間でわざなみのよう広がつた。

「先生! ちゃんと詳しく説明してよー」

「ええ・・・。」

先生がすすり泣きつつ説明してくれた。
途切れ途切れで細かい事はよく分からなかつたが、とりあえずだい
たいの状況は分かつた。

北条楓

月 日 7時頃。

なかなか楓が起きてこないので、遅刻しないかと心配になり、母親
が二階へ。

楓の部屋をノックするが、返事がない。

ノブを回すが、鍵が掛けられており、入れなかつた。
父親がやってきて、二人でドアをこじ開ける。

天井の照明器具に繩をかけ、楓は首吊り自殺。

驚いた両親があわてて楓を下ろすが、既に冷たくなつていた。

「・・・・・と、・・・・言つわけです・・・・」

重く沈んだ声で、先生は説明を終えた。

誰も何も言わないうが、楓の自殺は明らかに沙絵たちのイジメが原因
だ。

その一日は、教室中が喪に服しているように静かだつた。
沙絵たち三人も、責任を感じているのか、どのクラスメートよりも
静かだつた。

楓の自殺から、3週間。

授業参観があつた。

科田は、道徳。

驚いた事に、教室の後ろに並ぶ父母の中には、楓の両親が立つていた。

『起立、礼』

授業が始まると先生は、

「今日は、みんなに話があります」

と言つた。

「何人か気づいている人もいるかもしねないけど。後ろを見てください。楓さんの、ご両親が見えています」

先生の言葉でみんなは後ろを振り返り、そしてまた前を向いた。

「実は、先日、楓さんの部屋から遺書が発見されたそうです」
そうですね、とでも言つように、先生は楓の両親をうかがい見た。
両親はうなずき、母親がハンドバックから一枚の封筒を取り出した。
どこにでもあるような、キャラが書かれた、かわいい封筒。
何も聞いていなければ、楓が友達に向けて、軽い気持ちで書いた、
そういう手紙にも見えただろう。
それが遺書だつた。

「先生はこの前、」

口を開いた加賀爪 かがつめ 夢羽先生を、全員が振り返つた。

「その遺書を見せていただきました」

と、ここで加賀爪先生はうつむいた。

泣いているのか、と誰もが思つたが、彼女は涙をこらえ、顔を上げた。

「今日は、みんなにその遺書の内容を知つて欲しくて、持ってきて頂きました」と言つた声は、しかし震えていた。

「楓さんのお母さんに読んでいただきたいと思います」

の一言で、教壇上の人物は交代した。

「え・・・と、会つた事がある人もいると思いますが、初めまして、楓の母です」と自己紹介が始まった。

そして、いよいよ、封筒が開けられ、中の手紙が読まれ始めた・・・『みなさんへ

楓は、いろいろ辛かつたけど、頑張つて耐えました。

何をされても耐えました。

死んだら楽になるとも考えましたが、死んだらすべて終わってしまうと思いました。

ずっと耐えていたら、ある日味方してくれる人が現れました。友達が出来て、とても嬉しかった、ありがとね。

でも、もう耐え切れません。

疲れました。

何が終わつても、別に大丈夫だと思うようになりました。

友達も出来たし、短かつたけど、その日々はとても楽しかったよ。もう、夜も遅いから、そろそろ逝きます。

生きれなくてごめんなさい。でも、怖くないから。大丈夫です。

お父さん、お母さん、あと、楓の大切な友達、ごめんなさい。

さよなら。楓の心配はしないでね。幸せになれるから、大丈夫だよ。

後半は、楓の両親はおろか、クラスメートの何人かも泣き始めた。いじめを、見過ごすべきじゃなかつた。

と。

沙絵達三人も、うつむいていた。

そして、一筋の涙が頬を伝つていた。

重い雰囲気の中、授業終了を告げるチャイムがなつた。

「先生！ 楓のお母さん！」

「あら・・・？ 沙絵さん、魅華さん、それに千鶴さんも・・・」

先生が言い終わらないうちに、ほおを涙でぬらした三人は、

『ごめんなさい！』

声をそろえて頭を下げた。

「・・・え・・・・・？」

「楓を自殺させたの、うちらなんです！」

「うちらが楓をいじめてたから・・・！」

「ごめんなさい！ まさか・・・死んじゃうなんて思わな・・・く

『ごめんなさい！』

もう一度頭を下げたかと思うと、沙絵はそのまま床に座り込んでしまつた。

「うわああ～！～」

と、声を上げて泣き始めたのだ。

これには周りのクラスメートも、先生も、楓の両親も、三人の両親も。

とにかくみんながびっくりした。

沙絵につられて、周りのクラスメート達も泣き始めた。

『「じめんなさい!』』

『「う・・・ちらも、見て・・・みぬ・・ふりつ・・・して・・・つた!』』

『「つけらつ、がちゃんと・・・注意して・・・・・ればっ!...』』

『「ホント、に・・・『じめつ・・・・・なさ・・・』』』

『「自分がつ・・・・・いじ・・・・められつ、るのが・・・ヤだ・・・・た・・・からつ・・・!』』

びっくりしたのは楓の母である。

うちの子の為に、こんなに大勢が涙を流している。

うすうすわかっていた。

いじめられている事は。

だが、相談を聞いたら、楓を学校に行かせることが難しくなるのは。

不登校になってしまったのでは。という恐怖が頭をよぎり、今まで何も言わなかった。

しかし、遅かった。楓は、逝ってしまった。自分が事情を聞く前に。

しかし、すべてをこの子達が教えてくれた。

こんなに、素直に謝つたくれることが、嬉しくもあり、また悲しくもあった。

自分が、ちゃんと事情を聞き、学校に言つていれば。

こんなに素直な子達なんだ。楓が追い詰められていた事を知れば、すぐに止めてくれたかもしれないのに。

自分は馬鹿だ。『甘やかす』事と『受け止めてあげる』事をカン違
いしていた。

「ありがとう。みんな、事情を教えてくれて、ありがとね?」

大半が床に座り込んでしまった生徒達。

小さな体を抱きしめて、楓の母は一緒に泣いた。
その中にせ、みくるの姿もあった。

「みくるちゃん」

呼び止められて振り返った。

「あ・・・・楓のお母さん?」

「ええ。実は、お話をあるの」

「何ですか?」

「みんなの前では読まなかつたけど、あの手紙にせ、本当に続きがあつたの」

「え・・・?」

「これ・・・。あなたが読むべきだわ」と手渡された、先ほどの封筒。

中身を見ると、一枚だと思つていた便箋は一枚あつた。

『みくるちゃんに渡してください』

そうメモがされた便箋を開くと、

恐縮してこるような、小さくて整つた字が書いてあつた。

『みくるちゃんへ

楓の味方になつてくれて、ありがと!』

みくるちゃんに謝らなきやいけないことがある。

ひとつは、せつかく味方してくれたのに、楓がこの後死ぬ事。

もうひとつは、この前言つてたこと。

楓、何か気になる事しちやつたんだよね?

悪い所あつたら直そうと思つたんだけど。

正直に言つと、楓、みくるちゃんに何をしたのか覚えてないんだ。

最低だよね？ 友達傷つけといて、覚えてないなんて。
せっかく友達になつてくれたのに・・・。

せつかく友達になつてくれたのに……。
だから、謝らないまま逝くことになつちやつたけど……。

それだけが心残り。

怒つてもいいよ。楓はその怒る姿を見て、生まれ変わつたら、人を傷つけない人間になるから。

その時に、またみくるひやんに会えたらいいな。

短い間だつたけど。ありがとう。

そして本講はメンネ？
また会えたらいいね

樞
よ
じ

1

本当に、馬鹿なんだから、楓は。

最後まで 烈め直前まで 自分が悪いと想い込んでたんだ。…
そう考へると、自然に涙があふれ出て、声をあげて泣いた。

「うん。」
「あんなヤー。違つ! 違つんでー。」
「うわせに立派な

人間じゃない！」

「え？」

「おおー！…」
「むしろ、最低なんです！」
「イヤだイヤだあー！」
楓、戻ってきて

「な……え? みへむぢかん? ? ひつと・・・落ち着いて……」

その後、楓のお母さんになだめられて、つい話すすべての事情を話し

た。

彼女から帰ってきたのは、意外な言葉だつた。

「別に・・・大丈夫よ？」

「・・・え・・・？」

「きつと楓はうらんでなんかいないわ。そりやちょっとはびっくりしたかもしれないけど」

「なんですか？！ うちは楓を裏切ったの！！」

「でも、きつと大丈夫。楓は、味方が出来ただけで、きつと嬉しかったと思うわ」

「・・・」

「裏切られた悲しみは大きいかもしれない。でも、助けられた喜びのほうがずっと大きいはずよ？」

ちがう？ と問われ、みくるには返す言葉がなかつた。
そんな風に前向きには捕らえられない。
だが、そう考えると、とても心が落ち着く。
どつちにしても、楓が哀れでならない。

「そうだわ。今から、家に来ない？」

「え？ 今からですか？」

「そう。どつちにしろ、その顔じゃ、お家の人がびっくりするわよ？」

クスクスと笑いながら、彼女はハンドバックに遺書をしまつと共に、

折りたたみの鏡を貸してくれた。

覗き込むと、目が真っ赤ではねぼつたく、ほほには涙の跡がぱつちりとついた顔が映つていた。

「うちに来て、顔を洗つて、温かい紅茶でもどう？」

「いや・・・でも、いきなり押しかけたら悪いし・・・」

「平気よ。誘つておいて、押しかけただなんて思わないわ。それに、楓に線香もあげて欲しいわ。ぜひ！」

その後も、『いらっしゃい』『イヤ、でも……』との問答が続いた。

折れたのはみくるであった。

楓の家には、御香の香りが立ち込めていた。

「紅茶を入れてくるから、楓に線香をあげてあげて？」

「・・・はい・・・」

遺影の中の楓は、喜びに満ちた顔つきだった。

くすん・・・

鼻をすすりながら、線香をあげた。

運んできてくれた紅茶を飲むと、気持ちがいくらか落ち着いた。

「コレ食べてみて？ 私が焼いたクッキーなの」

と差し出されたクッキーをひとつつまんで、口に入れた。

サク・・・と言つ音と共に、香ばしい香りが口いっぱいに広がった。

そして後には、ほんのりとした甘みが残る。

「・・・とってもおいしいです・・・」

「 あ？ ありがとう。そのクッキーはね、楓の好物だったの

「 そうだったんですね・・・」

楓と同じものを食べている。

それだけで、なんだか楓の友達だと胸をはれる気がした。

そのあと、楓の母と、楓の話をし、ちょっとだけ泣いた。

みくるが玄関を出たのは、もうすいぶん日が沈む頃だった。

「夕焼けが・・・・きれい」

明日は、晴れるね。

・・・ひた・・・

「？」

一瞬振り向いたみくんだつたが、誰もこなごとに安心したのか。
再び前を向き、歩き出した。

11 北条楓 死亡推定時刻 深夜1-2時頃（後書き）

どうでしようつ？

これで、完全に過去編はおわりだと思います。

次回は「12 こには・・・？」。

次回がほぼ最終話です。

予定ではもう一話ありますが、話の流れは次回でおわりです！
あとほんのけよつと、お付き合いくださー！

楓・・・楓・・・

「・・・めんねつ・・・

本当に・・・『めんねつ・・・

つう・・・と、頬に暖かいものが流れた。
と、その涙は、あごに届くまもなく、ぐい、と拭われた。

誰？

その疑問と共に、自分が、横になっている感覚、瞼を閉じている感覚。

よみがえった。

まつて・・・うちは・・・どうなった?
楓? そこには楓?
追いかけられて、転んで・・・。

楓だとしたら、目を開けてはいけない気がする。
目をつぶつたまま、様子を全身でうかがっていた。

殺意は、感じられなかつた。

じゃあ、誰？

うつすらと、目を開けた。

白い天井。

知らない女。^{ひと}

それにお母さん。

そして、白衣を着た、男の人。

「い・・・」は・・・？」

出た声はかすれていて、まるで別人のようだつた。
あんなに走つたんだもの、当たり前か。
喉が渴いている・・・。

「病院だよ」

と男の人は答えた。

じゃあ、あなたは医者なの。
そうだよ。

言つたきり、看護婦に指示を出して、なにやらちよつとした検査を
始めた。

体温 心音 呼吸 などなど。

そして、それが終わると、

「何かあつたら、ナースコールを
と、病室から出て行つた。

「うちは・・・どうなつた？」

「みくるはね、道路に倒れている所を、通りかかった人が見つけてくれたのよ」

「そつか・・・。ここの人がそつなのかな？」

「ねえ・・・。ここの人は・・・誰？」

失礼な言い方かと思つたけど、お礼を言わなきゃと思つたから聞いてみた。

「この方は・・・」

言つてもいいのかという風に、みくるの母は女人を見た。

「私は、警察の後藤だ。後藤、律子」

「警察・・・？」

どうしてと言いかけて、やめた。

うちは、流歌を殺している。

それかもしぬれない・・・。

「ところで・・・お母さん・・・」

と、律子が言いにくそうに顔をゆがめた。

「あの、みくるちゃんに事情を伺いたいんですけど・・・」

事情・・・？ やっぱり、流歌の事を・・・。

「あ・・・ああ、ええ。分かりました。私は、席をはずした方が?」

「そつちの方が、警察としては、好都合ですが・・・」

「はい・・・。じゃあ・・・。30分ほどでいいですか?」

「はい。それだけあれば十分です」

「では、30分したら戻ります」

出て行こうとする母に、

「お母さん、うち・・・喉が渴いたよ。たくさん走ったから・・・と、みくるは言った。

「じゃあ、戻つてくる時にお茶かなんか買つてくるね

「・・・ありがと・・・う

「さて・・・。じゃあ、单刀直入に言おう」

・・・ 来た・・・

「君は、流歌をどうした?」

元々、警察に自首するつもりだった。
かまわない、正直に言おう。

「殺した・・・」

「・・・なるほど・・・今の時点で、自供とする。犯人は君で確定
だな」

言いながら律子は信じたくなかったと首を振った。

「はい・・・」

「なぜ?」

なぜ? なぜ殺したかと言えば、楓のせいだが・・・
「言つたつて、絶対に信じませんよ・・・」
「どうだろうね? 場合によつては信じる」
「じゃ、聞いてください。とりあえず、最後まで
「言つて」

みくるは、楓の自殺の事、足音の事、流歌が乗り移られた事と共に、
なぜ道路にいたのかまで話した。

「以上です。後は、あなたの方のほうがよく知つていて
「なるほど・・・」

じつと考え込むそぶりを見せた律子は、そのうち顔を上げた。

「君は、病院に運び込まれてから、約半日眠っていた

そんなに?」

「その間、私は常にこの病院にいた。そして、この病室を度々訪ね
てきた」

・・・何を言いたいのかまったくわからないが、とりあえずうなず
いておく。

「なぜなら、君が流歌殺害事件の容疑者だつたからだ」

「そして、その度に、君は『楓』と言つていた。また、『ごめんね』

と

「・・・・はあ・・・・」

「『楓』というのがどういう意味か。その謎が、今解けたよ」

・・・だからなんだと言つのだ? この律子という女、さつきから

言い方が遠まわしだ。

「今度は、私の意見を聞いてくれるかな?」

ほんとは、じつこつ事は、話してはいけないんだけど。
と笑いながら、律子は話し始めた。

「いいかい? これは、君が、楓に対する罪悪感、または、恐怖や
それに近いものによつて、幻覚を見ていた場合の話だ」「
幻覚? そんなはずない、現に、楓が襲つてきたじゃないか。
うちの手には傷が残つている。

「まず、足音の話だが、それは簡単だ。幻聴だ、と言つ事にしてお
けり」

「そして、流歌の話。これは、理由はよくわからないうが、すべて彼
女の演技だと言つ事にすればつじつまが合つ」

「何のために? 意味がないよ、そんなことしたつて! !」

「コレは私の推測だが・・・流歌は、きっと、君が楓に悩まされて
いる事に気づいたんだ。そして、それと共に、なぜかはしらないが、
君が裏切つた事で楓が死んだと気づいた

「どうということですか? !」

「落ち着いて・・・つまり、そうだな、流歌は、楓の復讐をしよ
うと考えた。と言つのはどう? 流歌は、楓が死んだと言つ事が許
せなかつた・・・きっと、陰の親友だつたりしたんぢやないか?」

「流歌が？ 楓の親友？ でも、なんで陰の友達なの！？」

「君は、過去に、楓の味方をしたと言つ事でいじめを受けたんだろう？ ならば、流歌も同じだよ。きっと、彼女は、自分がいじめられるのは嫌だつたんだ。」

「そんなの・・・みんなと同じじゃない！」

「違うよ。正義感の強い彼女は、それでも、何もしないよりはと、陰で味方だつた。とか？」

「・・・・・・でも、楓はそんな事一言も言わなかつた・・・・」「これも私の推測だが・・・楓は、みんなの前では何もしない流歌より、みんなの前でも自分にやさしく接してくれる君の方がよかつたんだよ。それで、君に流歌の事を言つたら、君も流歌と同じ方法を取るのではと、怖かつたのかも・・・」

「分かりました・・・それで・・・？ 流歌が演技をしていたと言うのは・・・」

「まず、何らかの方法で、例えば、友達に頼むとか・・・。足音を君に聞かせる。そして、誰もいないよと言つ。ドアを開けたのは流歌だらう？ 共犯者が君の視界に入らなによつにぐらいは計算して開けるし・・・そして、乗り移られた振りをする」

「あとは・・・楓の振りをして・・・うちを刺す・・・？」

しかし律子は、首を振つた。

「ところがね、違うんだよ。君の話と、現場は」

「はー？ どういう事？！」

「まず、第一に、あの現場にナイフはあるか、刃物らしきものは置いてなかつた」

驚きと、抗議の声を上げようと口を開いたみくるを、律子は制し、話し始めた。

「第二に、握つていたのは、ナイフではなく、筆だつた」

「そんなん！」

「黙つて！ そして、第三に・・・血ではない。絵の具だ」

「絵の具・・・？」

「君の絵に手を入れるためについていた、絵の具を、君は血と見間違えた」

「そんなつ！いくらなんでも、筆をナイフに、絵の具を血になんて・・・！」

絵の具だ」「

「でもつ！ だつたら、流歌はウチに復讐なんかできやしない！！
「それは、よく分からぬいけど・・・そんなに強い復讐のつもりじ
やなかつた。きっと。赤い絵の具で、君の顔や手足を、血まみれに
する・・・とか、そんな事だらうな・・・」

「そんな、そんな二！ じゃあ！」

「君は、落書きをしようとした流歌を、襲ってきた楓の幻覚と重ね合わせてしまった。そして、自分の身の危険だと思い、側にあつたイスで、殴りつけた。そんなところじゃないのか？」

そして、ギッと、律子を睨みつけた。

「違う・・・！　違う！　うちば、流歌を殺してなんかいなーい！
あれは流歌じやない！！　うちが、そんな理由で、流歌を！　流歌
を殺すわけないんだああああああああああああ！」

耳をふさぎ、頭を横に振り、悲鳴に近い抗議の声を上げた。

みくるの頭に、律子両手が伸びてきた。
そして、律子はそのまま優しく、みく

「分かつてる・・・君の行為は、流歌への殺人じやなくて、楓への正当防衛だつたんだよね？」

耳元で優しく、さとすようにわざやかれ、みくるは動きを止めた。

それと共に、みくるの目から大粒の涙が流れ落ちた。

「辛かつたね・・・罪悪感で一杯だつたんだよね・・・？ 大丈夫だよ。本物の楓はきっと、君を許しているよ。きっと許しているよ」

「う・・・うああ・・・つ・・・」

「・・・大丈夫だよ。もう大丈夫・・・」

優しく頭をなでる律子の手は、微かに震えていた。

この子はこの年で・・・とんでもない罪悪感を背負っていたんだ・・・。

いや。背負っているんだ・・・。

ずっと、ずっと背負ってきたにちがいない。

みくるの嗚咽が止まると、律子は、そつとみくるを抱きしめて、そして離した。

「・・・落ち着いた？・・・」

「・・・はい・・・取り乱してすいません・・・」

声は震えていたが、目は赤かつたが、大丈夫だ。

この子は強い子だ・・・。

「ごめんね・・・言つておかなきや・・・。罪の事と、処分の事・・・」

「はい。大丈夫です。言つてください」

「・・・罪の事だが、殺人罪。だが、君は未成年だし、精神病と言う事がはつきりすれば、処分はもっと軽くなるだろう。ちゃんと、流歌の罪を償つて、立派な大人になつてね？」

「大丈夫です！ きっと、きちんとした、胸をはれる大人になる！」

みくるはニッコリと笑つてうなづいた。

「よかつた・・・」

ガララララ・・・・

「すいません、30分たつたんですけど・・・」

決まり悪そうな顔をして、みくるの母が廊下から顔を出した。

その後、三人でとりとめのない話をして、たくさん笑った。

2時間ほど話をして、律子は腰を上げた。

「じゃあ、そろそろ私はお伺いとします・・・仕事もありますし・・・」

「そうですか、婦人警官というのも大変なお仕事ですね・・・」

「まあ、自ら志して選んだ道ですから・・・」

「律子さん、また来て下さいね！」

「ははは、また、暇なときにでも寄るよ。じゃあね

「さよならあ～」

「色々とありがとうございました」

その後もみくるの母は病室に残り、面会終了時間まで居座り続けた。何の話をしたかといえば、やはりくだらない話であったが。あえて、流歌の事には触れないでおいてくれた母の心遣いが嬉しかった。

今は、そのことを考えたくない。

これから、みくるは、楓と流歌、一人分の罪悪感を背負つて生きていくだろう。

しかし、そんな事は、今は考えなくていいだろう。

「綺麗な夕焼けね・・・」

「うん、燃えるような、朱色」

「すいません、もう、面会終わりなんですけど・・・」

看護婦がドアから顔を出した。

「おひすみせん。みくわ、じゅあ、明日また来るからね」

「うん、
ばいばい」

それにしても・・・
本当に、綺麗な夕焼けだ・・・。

明日は、晴れるね。

聞きたくなかった。こんな幻聴は・・・。

やつぱり、うちは楓を見た。あれは幻だ。

だが、うちの中の楓は、うちを呪い殺すつもりなんだ。
現に、今、うちの心は、恐怖と、それと同量の罪悪感で押しつぶされそうになつてゐる。

お願い。
あたしを許して。

それが、あたしの望み。

ひた・・・・・
ベット下から、足音が聞こえる。
口口じいるのか・・・。
ずつ・・・。

無残な姿で現れたのは・・・

「流歌」

刃物を持った。・・・。流歌。

『あなたはあたし達を殺したーー！

ふたり
楓と流歌の声が、重なつて聞こえた。

ザシユツ！！

めんで。

不可解な音が響いていた。

真夜中の病院の暗い廊下に

すつ・すつ・すつ・すつ・すつ・すつ・すつ・すつ・すつ・すつ

まるで何かを引きずるような、不可解な音が。

13 綾瀬未来（前書き）

やっと完結です。待たせてごめんなさい・・・とか、待ってる人なんていなか（笑）

「綾瀬さん～？ 綾瀬未来さん？ 検温の时间ですよ？」
看護婦が、みくるのベットのカーテンを勢いよく引いた。
「あれ？」
そこにみくるの姿はなかった。

「みくるさん？？ ねえ、どこにいるの？！」

職員総動員で、病院中を探したが、結局見つからなかつた。

一ヶ月後。

みぐるの母は嘆き悲しみながら、自宅の一階にいた。

自分もみぐるを探した。

病院内も、町内も。

近所の人々にも協力をあおいだ。

警察にも捜索願を出した。

だが、結局みぐるは見つからず。
けして暇ではない警察は、捜索を打ち切ってしまった。

一ヶ月たつた今も、母は希望を捨てきれずにいる。
心の底では分かっている。

赤ん坊ではない。

生きていれば、無事であれば、必ず連絡ぐらいはしますだろう、と。

しかし、同時に母として、みぐるを死んだものと諦めたくはなかつ
た。

今、母はみぐるの部屋に立ち、みぐるの痕跡を眺めながら、静かに
涙を流していた。

みぐるのベッド。

みぐるの机。

みぐるが大切にしていたぬいぐるみ。

みぐるがキレイに飾りつけたカレンダー。

「みぐるの

「みくるが

があふれていって。

直視できるものではない、が。
せめて、みくるの生きている、生きていた証が。

心の傷を埋めてくれればと、母は部屋を飽きたことなく眺めていた。

しばらくして落ち着いた母は、みくるの部屋を歩き回り始めた。

ベットの下を覗き込んだり、棚を探つてみたり。

みくるがここにいれば、眉をしかめて

「お母さん… やめてよもづ…」

と怒るだろうと分かっていても、てがかりがないかと探していた。

みくるの所在に関して、生死に関して。

あるわけがないと思つ心の片隅で、『もしかしたら』と思ひながら。

そして、机の引き出しを開けた時。

一冊の薄いノートを見つけた。

『記田』

だった。

- - - - - その後、みくるの姿を見たものはない - - - - -

・・・・・・・・ひた・・・・・・・・

足音は、復讐^{シナギ}をつれしていくる・・・。

足音がひとつ

END

13 綾瀬未来（後書き）

長い間ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7572d/>

足音がひとつ

2010年10月9日06時21分発行